

壮大な歴史の中で

[聖書]出エジプト記 1章 1～14節

ヤコブと共に一家を挙げてエジプトへ下ったイスラエルの子らの名前は次のとおりである。ルベン、シメオン、レビ、ユダ、イサカル、ゼブルン、ベニヤミン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル。ヤコブの腰から出た子、孫の数は全部で七十人であった。ヨセフは既にエジプトにいた。ヨセフもその兄弟たちも、その世代の人々も皆、死んだが、イスラエルの人々は子を産み、おびただしく数を増し、ますます強くなって国中に溢れた。そのころ、ヨセフのことを知らない新しい王が出てエジプトを支配し、国民に警告した。「イスラエル人という民は、今や、我々にとってあまりに数多く、強力になりすぎた。抜き取り取り扱い、これ以上の増加を食い止めよう。一度戦争が起これば、敵側に付いて我々と戦い、この国を取るかもしれない。」エジプト人はそこで、イスラエルの人々の上に強制労働の監督を置き、重労働を課して虐待した。イスラエルの人々はファラオの物資貯蔵の町、ピトムとラメセスを建設した。しかし、虐待されればされるほど彼らは増え広がったので、エジプト人はますますイスラエルの人々を嫌悪し、イスラエルの人々を酷使し、粘土こね、れんが焼き、あらゆる農作業などの重労働によって彼らの生活を脅かした。彼らが従事した労働はいずれも過酷を極めた。

[1] 出エジプト記と「今」の私たち

いよいよ 8 月を迎えました。「聖書教育」誌に従うと、しばらくは旧約聖書の「出エジプト記」が聖書箇所になっています。これは色んな意味でタイムリーなことなのかも知れないと思っています。

もちろん皆さんご存じのようにこれははるか昔のユダヤ人の歴史の書です。紀元前 13 世紀頃だと言われています。原題は「エクスダス」と言って、「脱出」という意味です。「脱出」。私たちが今これを教会で共に読むということは、確かに昔のイスラエルの民の解放物語を知ることでもあります。それ以上に、神様が歴史に働かれているということ、そしてその同じ神様が、今、私たちが罪の奴隷からイエス・キリストによって解放(脱出)して下さった、そのことに信仰の思いを馳せることに繋がると思います。今日は後で、「**主の晩餐式**」も行いますが、正に、**主イエスが「過越しの小羊」「犠牲の小羊」**となって下さったことを感謝することでもあります。それは「出エジプト記」における神様の契約ということと深く結びついています。

加えて思うことは、今のこの「**新型コロナの状況下の教会**」ということですが、何か得体の知れないものに捕らわれているような状態ではないでしょうか。自分の力ではそこから自由になれない。そういうこの**現実(荒野)**の中で**神様はどのように神様の民を導かれようとされているのか**、またどのように私たちに語りかけておられるのか、そのことをこれからご一緒に見てゆきたいと思うのです。

[2] 「**歴史に働かれる神**」

今日の所はまだ“序論”の部分になるかと思いますが、ここにはもう既に神様の壮大な御計画（それはまだ人間の目には隠されている）が暗示されているのだと思います。当時のこの西アジア地域において力を持っていたのは**エジプト**でした。そこに弱小のユダヤ民族が共同体として生きていたのです。初めは70人程だったと言います。吹けば飛んでしまう“**からし種**”のような**共同体**です。

そもそもなぜここにユダヤ人たちがいるのか。あの**創世記のヨセフ物語**に繋がっている訳です。本当に不思議な神様の御手の中で、兄弟たちの反感を買い、エジプトに売り飛ばされたヨセフが、エジプト王ファラオの信頼を得るまでになり、その国の宰相にまでなったという歴史がありました。そして、そこで同族の者たちが暮らすようになった。(1章に名前が載っています)。しかし時を経て、ヨセフのことを最早知らない者がエジプトを支配するようになると、人口も増えていたこのユダヤ人たちを警戒し出したと書いています。そしてエジプトの国策のために、良いようにユダヤ人たちを**奴隷のごとく扱った**のです。(11～14節)

まだ、**闇の中**に閉ざされているような状況ですね。人生が置かれた「**環境**」というものは、時に残酷です。**人生のマイナス地点**に立たされることがありますね。けれどもその中で、**歴史を導かれる神様**が或る時は鮮やかに、或いはじっくりと歯車が回るように御業をなさいます。出エジプト記の大きなテーマは「**歴史に働かれる神**」です。私たち人間は、人生のマイナスと思える地点では不安になって、神様は本当にいらっしゃるのだろうか、私(たち)は捨てられたのではないだろうか？と運命論的に思ってしまう。けれども、**聖書が証しする神様は生きておられます**。来週はこの過酷な現実の中に、神様が立て給う一人の人・**モーセの誕生**が描かれます。これは、神様の御計画が進んでいる、ということです。

[3] 「**アーメン**」と告白して生きる

ユダヤ人の祖先は、自分たちを見捨てずに選んで下さった主を仰ぎながら生きました。主がどんなに偉大なことをして下さったのか、それを「受け継いで」「告白」していったのです。その当時を生きていた人々はどんどんいなくなりま

す。しかし、彼らのアイデンティティーは「神は生きておられる」ということを自分自身のこととして受け止めて行くということでした。「告白」するということはそういうことです。聖書の言葉をいくら知っていても実は何にもならないのだと思います。み言葉をきいたのなら、「アーメン！」と受け止めることです。「教会」も同じです。教会は、主に、共に「アーメン」と言う所です。

イスラエルの民も、実は神様から見ればスツキリしないといえますか、齒がゆい思いでずっと見ておられたのだと思います。でも、荒野の中を歩ませることで、本当に神様に信頼する心を育てられたのだと思います。ユダヤ人たちはその先祖の信仰を、今の自分たちに結びつけて告白するということをととても大切にしてきました。例えば申命記の 26 章にはこうあります。

「あなたはあなたの神、主の前で次のように告白しなさい。『わたしの先祖は、滅びゆくアラム人であり、わずかな人を伴ってエジプトに下り、そこに寄留しました。しかしそこで、強くて数の多い、大いなる国民になりました。エジプト人はこのわたしたちを虐げ、苦しめ、重労働を課しました。わたしたちが先祖の神、主に助けを求めると、主はわたしたちの声を聞き、わたしたちの受けた苦しみと労苦と虐げを御覧になり、力ある御手と御腕を伸ばし、大いなる恐るべきこととしるしと奇跡をもってわたしたちをエジプトから導き出し、この所に導き入れて、乳と蜜の流れるこの土地を与えられました』と。

神様の憐みをいつも心に刻んだのです。それはまた自分たちの過ちにも拘らず神様が赦し続けて下さった、その歴史を心に刻み続けることでもありました。

現在、東京神学大学の学長である芳賀 力先生が、『救済の物語』という本の中で、「イスラエルは、ヤハウェ(主)の救済の歴史という記憶によって生きている」と書かれていました。それは一般的な意味で「神とは何か、救いとは何か」というような哲学的な思弁ではなく、具体的な救いの経験の記憶を共有する共同体として生きるということなのだと。そしてそれは「物語」を持っていると言うのです。「物語(ストーリー)」ですから、具体的なのです。芳賀先生は分かり易くこのように語られます。—「一人の人物が自分人生にとってかけがえのない人である場合、あたしはこの友人、妻、夫に対して、その本質を定義しようとは思わない。むしろ私はこの人と出会って以来共有してきた人生のストーリーを物語るであろう。そのストーリーこそが自分たちの現在の生を形造っているからである」。…本当にそうですね。「信仰」というのは「観念」ではなく、「出会い」なのですから。

私たち、神様を語るという時、それは、「自分」というフィルターを通して語らざるを得ないのですね。“聖書はこう言っています”だけでは、人格的な出会

いにならないのです。それが「証し」ということの大切さだと思います。そして、それは「言葉」以上のことだとも言えます。例えば、教会の礼拝に参加すること、これ自体が、言葉を超えた証しです。或いは、日常の中で祈りの時間を持つこと。これも「証し」です。

[4] この「旅」を導く方と共に

よく言われるように信仰は「旅」ですね。しかし私たちは、いにしへのユダヤ人たちがほど「旅」の厳しさを知らないでいるのかもしれないと思います。戻る家がある（遊牧民は違います）。定期的なお金を手に出来る。また、とりあえず健康な体がある。しかし大切なのは、たとえそのようなものが失われることがあってもあなたは神様に信頼して、告白して生きて行けますか？と仰うことです。そのことが問われます。

しかし、この「旅」は、私たちの信仰心の大きさや「頑張り」に寄り頼むことでは、進み行けないものだと思います。私たちが頼るのは、救い主です。このお方はこのようにおっしゃいました。今日の招きの聖句を思い起こして下さい。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」（ヨハネ 15:16）ここに、私たちの「旅」を終りをも保証し、迎えて下さるお方のお約束があるんです。

ご一緒に、人生の、また、教会の「出エジプト」の旅を歩んでまいりましょう。お祈り致します。

神様、私たち一人ひとりあなたの壮大な御計画の中に命を与えられ、生かされ、この地上の旅を導かれています。あなたを見失ってしまうかのような思いに囚われる時、どうか、あなたのお約束を思い出させて下さい。「あなたを捨てて孤児とはしない」、「わたしは良い羊飼いであって、良い羊飼いは羊のために命を捨てる」、「あなたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたを選んだのだ」。十字架で、私たちへの愛を揺るがぬものとして下さったあなたを私たちもいつも新たな思いで告白させていただきますように。

主の御名によって祈ります。アーメン。